

復活節集会の感謝集会

「永遠の生命」を生きる（二）

2016年4月3日（京都）  
奥田 昌道

- 1、ロマ書からのメッセージ：「肉の生き方」と「霊の生き方」
- 2、キリストの御霊は我々の肉体をも生かす
- 3、ヨハネ伝のなかの「永遠の生命」
- 4、ガラテヤ書のなかの「永遠の生命」
- 5、キリスト者の使命：「永遠の生命」を分かち与え次代に伝える
- 6、キリストと一緒に生きてゆく、苦難も栄光もキリストとともに

1、「ロマ書からのメッセージ」：「肉の生き方」と「霊の生き方」

皆さん、おはようございます。復活節集会も講演会も、みなさんがいろいろと案内をしてくださって、講演会もたくさんの方がお見えになりました、来会者カードをこれだけたくさんいただいております。ここで読み上げることは差し控えますけれど、かなり年配の方が多いという感じでした。それとやはり、皆さんそれぞれ、何か受けとるものを受けとってお帰りになっているような感じでした。

今日は復活節集会と講演会の感謝集会というように銘打っております。先ほどロマ書の8章を読んでいただきました。ロマ書は何か難しい感じをお受けになるかもしれませんが、れど、この8章で言っていることは、要するに

「肉の生き方」と「霊の生き方」

ということ。旧い自分<sup>ふる</sup>というのは、これはどうしても「肉の人」なんです。つまり、この世中心ということになってしまいます。それに対して「霊の人」というのは、

「神さま、イエスさま、主さま、あなたが必要です」

という生き方をしていく、そういうふうに変えられてしまっている、そういう人のことです。

「肉の人」は、どうしても自分が出発点になる。

「果たして自分は神様に喜ばれているのだろうか」

とか、

「自分は御意にかなっているのだろうか」

とか、

「自分はこれでよいのだろうか」

というのは、自分が出発点なんです。それに対して、「霊の人」というのは、

「自分がどうのこうのとか、もう言わなくていい。主さまが私に代わって全部やっ



てくださったのだから、私はいただいた生命を精いっぱい生きる。それだけでいいじゃないか」

という人です。

そのように「肉の人」と「霊の人」は出発点が違う。自分が出発点で、

「自分はどうかだ、ことうだ」

と言っている限りは、だめなんです。

イエス様という方は、初めから霊の人ですよ。肉体をまもっていらつしやるけれど、生き方は全く霊のお方です。

「**霊の念は生命なり、平安なり**」（ロマ8・6）

とロマ書にあります。「霊の人」というのは、

「神様、主さまがもう自分のすべてをなのだから、自分はどうかだろうかということ自体、考えなくていい。ただ御意にかないたい。御意の中に生きたい」

と。そういう思いだけで生きている、そういう人のように思う。ロマ書は律法のことを非常に取り上げていまして、

「律法の道で生きるということは、どうしてもその行き着くところは死なのだ」

と。だから、そこから外れて、

「上から賜る御霊の導きに委ねて生きる、それしかない」

ということ、ロマ書は全体で言おうとしているように思うんです。

イエス様も律法の道を歩んだけれど、イエス様は、律法を超えて、律法の源である神様ご自身と一つになってしまわれている。神様の御意を受けとることが第一で、御意に従って歩いていたら自然と律法は満たされていitんです。人間の方は、

「律法を自分の力で満たしたら、やっと神様に受け容れてもらえる。まだダメです

か。自分の努力の結果を認めてほしい」

と。そこに「自分」が立っていたような気がする。つまり、律法の道だったら、十字架は要らない。自分が主体で、

「自分が御意にかなって合格点を与えられたら、神様は受け容れてくれるだろう」ということで、十字架は要らないんです。

それに対して、信仰の道というのは、恵みなんです。自分がどうのこうというのは無くなつてしまい、神様の生命が恵みとして我が内に降ってくる。神様が主体なんです。その違いです。キリストが十字架で、全部やってくださった。我々はそれを、ただありがたくお受けする。それだけしかない。

「**肉によりて弱くなれる律法の成し能わぬ所を神は成し給えり**」（ロマ8・3）  
とありますでしょ。

律法が目指したのは、やはり、神様に受け容れていただくこと、神様に喜んでいただけ



ること、もつと言えば生命なんです。生命をいただくことが律法の究極の目的だったと思いますけれども、それが「自分」から出発している限りは、到達し得ない。それをこんどは神様の方から、

「あなたがたが歩んできた律法の道では、どうにもならないだろう。だから、イエス様があなたの方のそういった、自分から出発するという出発点そのものを全部、十字架で片付けてくださった。だから、このお方をただ受けとりなさい」とそう言うてくださった。律法ができないことを神様が成してくださった。御子を我々と同じ姿で遣わして、そして、そのお方において、我々の自己中心的な、人間中心的なものを全部、背負って処理してくださいました。

「即ち己の子を罪ある肉の形にて罪のために遣わし、肉に於て罪を定め給えり」  
（ロマ8・3）

「肉に於て罪を定め給えり」というのは、ご自身の子を、我々と同じ人間の姿で我々のそういう罪を背負うために遣わしてくださった。そして、その我々と同じ姿のなかで断罪し、十字架で片付けてくださったということ。これは何だか、キリストは初めから我々の罪を背負うために世に降られたみたいなきき方ですね。

モーセの段階では、キリストはまだいらつしやいません。キリストは隠されているから、「おまえたちはこの道を歩みなさい。そうすれば生命だよ」ということで律法が与えられた。けれど、

「はい、やります」

とやっても、結局は自己中心的な自分が出発点ですから、やったらやったで、

「やれました」

と自分を誇り、恵みに委ねていません。

「自分がやった成果として生命をもらうのだから、己を誇っていいじゃないか」という、そんな感じですね。この世の人は、やってない人に対しては、

「あいつはだめなやつだ」

と裁きますし、自分がやったら、

「おれはやったんだから、いろんなご褒美をもらったって当たり前じゃないか」

と、全部、栄光を自分に帰しています。パリサイ人はみんなそうでしょ。人に対しては裁き、自分に対しては栄光を自分に帰する。

でも、キリストの生き方はまるで反対です。

「すべては御意だけ。自分には何もありません。自分では何もできません。全部、父なる神様だけです」

と。まるで無能力者ですね。神様が出発点で、神様の方から出発して、

「御意だけが、このだめな人間を通して成ってください」



というのが、霊による生き方です。キリストの場合は、天上から降<sup>くだ</sup>ってきてくださったのですから、いくら着地されても、思いはいつも天と一つになっていらつしやる。そういう感じがいたします。

だから、肉に居る限りは神様を喜ばせることなどできない(ロマ8・8)。我々人間は、そのままの生の姿<sup>なま</sup>では肉に居て、神を喜ばせること<sup>あた</sup>能われないような、そういう存在です。しかし、この神の御霊<sup>みたま</sup>、神から流れてくる御霊——我々にとってはキリストの御霊——それが宿つてくださっていると、我々はもう肉の人ではなくなっている。

我々の本質が、肉の人ではなく、霊の人が変わってしまっている。そうでなければ、キリスト者でない。

「キリストの御霊が宿っていなければキリスト者でない」という。

## 2、キリストの御霊は我々の肉体をも生かす

私が今日、強調したいのは、

「キリストが居てくださるのなら、キリストの御霊が宿つてくださるのなら、本来死すべきものである我々の肉体ですら、本当に死を克服して生きることができると、そのことを申し上げたいのです。

「キリストが居てくだされば、<sup>からだ</sup>体は罪によって死んでいるようなものだけ

ども、<sup>いのち</sup>霊は義によって永遠の生命だよ」(ロマ8・10)

と。だから、

「<sup>あま</sup>体のことは諦めなさい。仕様がなインだから」

と言われるのが普通でしょう。しかしながら、

「<sup>からだ</sup>神様はイエスをよみがえらせた。そのお方の霊があなたの中に宿っているな

ら、あなただって、死すべき<sup>からだ</sup>体をも生かし給う」(ロマ8・11)

と書いてある。

大きな手術から回復して今日ここに来てくださっているM君も、Nさんも、生かされたんですよ、死すべき体を。ロマ書8章11節には、そのようなことがちゃんと起こると書いてある。それだけの力を神様は我々にくださるし、御意ならば何とでもなさってください。死ぬべき体を生かし、そして用いてくださり、働かせてくださる。これが、永遠の生命を賜っている人間の生き様<sup>さま</sup>だと思うんです。

永遠の生命というのは、時間の長い短いではなく、質的に滅びず、常に輝いているという<sup>こと</sup>。そして、永遠の生命の質は、愛である。

これは、「肉なる人」と全く反対です。肉なる人は、どうしても自己中心。それに対して、この永遠の生命をいただいている人は、キリストと同じような生き方に変えられています。



だから、そういうキリストの霊をいただいている方は、本来なら滅びるべき体でありながら、それが死を乗り越えて行く。

「キリストを死人のうちからよみがえらせてくださった方は、あなたの内に宿り給う御霊みたまによりて、あなたの死ぬべき体をも生かし給う」

と書いてある。本当に、癌がんであろうが何であろうが、御意ならば生かし給う。ただもう、全部預けて、

「主さま、生死は乗り越えて行きますから」

と、それがこの8章の終わりのところですね。

「我等は勝ち得て余あまりあり」（ロマ8・37）

そのように御霊とりなが執成とりなしてくださるから、

「一切のことが相働あひきてプラスになっていく」（ロマ8・28）

「御子みこと同じ姿に変えていってください」（ロマ8・29）

と書いてあります。

「たとえこの体からだは崩れ、壊れ、滅びていくように定められていても、しかしながら、御意みこころならば、その死ぬべき体を生かして、用いて、素晴らしい働きをさせてくださる。永遠の生命の質しつというのはそのようなものだよ」

と。そういうことを、このロマ書8章からは受け取りたいと思います。

### 3、ヨハネ伝のなかの「永遠の生命」

それから、「永遠の生命」という言葉がいちばんよく出てるのは、ヨハネ福音書です。ヨハネ伝で「永遠の生命」というところだけマークを付けながらずっとたどっていくと、とても楽しい。それをちよつと拾って行って、それから次の話に移りたいと思います。

まずは、3章のところからです。3章14節から。

「モーセ荒野にて蛇を挙げあげしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。すべて信ずる者の彼によりて永遠の生命いのちを得ん為なり」（ヨハネ3・14、15）

これは、十字架のことです。ここで「信ずる者」という言葉が度々出てきますけれど、「信ずる」というのは、

「体で受けとつてしまう。イエス・キリストという方をいただいて、もうその方と一如一体となつてしまう」

ということですよ。

「わが肉をくらい、我が血をのむ者は、永遠の生命をもつ」（ヨハネ6・54）

「我を食らい、我を飲め」

とおっしゃっていますね。

「私を食べる、飲め、私と一つになれ」



と。「信ずる者」というのは、そういう受けとり方をする者のことです。頭で、信じます。神の子であることを信じます」

というような話ではないということですよ。ヨハネ伝の最後の方の、

「永遠の生命は、唯一の真の神であるあなたと、あなたがお遣わしになったキリストを知ることにあります」（ヨハネ17・3）

この「知る」というのは、「一如一体とされる」こと。「信ずる」というのはそういう事態なのだ、そういうふうを受けとつてください。そのように信じる者は、もう、永遠の生命を受けてしまう。

「それ神はその独子を賜うほどに世を愛し給えり、すべて彼を信ずる者の滅びずして、永遠の生命を得んためなり」（ヨハネ3・16）

一如一体とされるんです。自分からそう成れるのではなく、キリストの方から働いて私を抱きかかえて、

「お前と私は一つだよ。お前は永遠の生命だよ」

と。キリストの方が私を捕らえてくださる。先日、二年前から少女を監禁したという事件がありましたね。あのような人に捕まったら大変です。本当にお気の毒なことでした。でも、キリストに監禁されるのであれば、それは、

「うろろう出かけて行って、サタンにやられないために守ってあげるよ」ということです。

「あなたが本当に独り歩きできるようにまで、ちゃんと守ってあげるよ」と言つて、守つてくださる。キリストに捕えられるというのはそういうことです。

「彼を信ずる者は審かれず」（ヨハネ3・18）

とあります。それから3章の終わりの方に、

「御子を信ずる者は永遠の生命を持ち、御子に従わぬ者に生命はない。かえつて、神の怒りがその上にとどまる」（ヨハネ3・36）

とあります。それから4章、

「すべてこの水を飲む者は、また渴かん。されど我が与うる水を飲む者は永遠に渴くことなし。我が与うる水は彼の中にて泉となり、永遠の生命の水、湧き出づべし」（ヨハネ4・13、14）

それから、同じ4章36節に、

「刈る者は酬を受けて永遠の生命の実を集む」（ヨハネ4・36）

という言葉も出てきます。それから5章にいきますと、

「誠にまことに汝らに告ぐ。我が言をききて我を遣し給いし者を信ずる人は、永遠の生命をもち、かつ審判に至らず、死より生命に移れるなり」（ヨハネ

「信じる者はキリストと一如一体にさせていただける。そういう者は永遠の生命を持ち、もう既に生命のなかにある」という。それから39節、

「あなたがたは聖書のなかに永遠の生命があると思つて聖書を調べているけれど、聖書は私のことを証している。それなのに、あなたたちは、その生命を得るために私のところに来ようとしななんだね」（ヨハネ5・39～40）

この「生命」と「永遠の生命」は、同じ事ですね。それから6章に行きますと、

「汝らが我を尋ねるは、徴を見し故ならで、パンを食いて飽きたる故なり。朽つる糧のためならで、永遠の生命にまで至る糧のために働け。これは人の子の汝らに与えんとするものなり」（ヨハネ6・26～27）

「パンを食べて満ち足りたから、私を捕まえようと来たんだね。でも、そうじゃないんだよ。朽ちる糧のためではなく、永遠の生命にまで至る糧のために働きなさい」と。

そうおっしゃっています。この世の人は、この世的な生命、つまり自分の肉体の生命しか知らないから、この世の生命を長続きさせるために一生懸命働く。それが職業の、この世的な意味でしょ。

ところが、我々クリスチャンの職業意識は、そのようなものではない。

「働いて金を儲けないと生活していけないから働く」というようなものではないんです。

「まず神の国と神の義を求める。そうすれば、すべて必要な物は与えられる」

だから、生命を養うために無理してせわしく働くという次元ではない。

「本当に神様に委ね切つて働いていれば、それは永遠の生命だよ」

ということですよ。

「永遠の生命をいただいたから、それで、喜々として働く。忙しくて仕様がな」と。

それが、永遠の生命をいただいた者の働き方のような思いがする。キリストをいただいたら、おのずとそういう生き方をしてしまう。永遠の生命をいただいて、そのような者らしく働かせていただく。そういうことだと思います。

それから6章39節、

「我を遣わし給いし者の御意は、すべて我に賜いし者を、我その一つをも失わずして、終の日に甦らする是なり」（ヨハネ6・39）

「わが父の御意は、すべて子を見て信ずる者の永遠の生命を得る是なり」（ヨハ

ネ6・40）

「終の日」というのは、聖書では最後の審判の日を指していますけれど、私は、講演会でも申しましたように、

「今日が終わりの日。今日という日に完全燃焼して生きる」



という、そういう心根で生きます。それから47節のところ、

「信ずる者は永遠の生命を持つ」(ヨハネ6・47)

「我は生命のパンなり。我は天より降りし活けるパンなり。人このパンを食わば永遠に活くべし」(ヨハネ6・51)

このあたりの「永遠に」というのは、「いつまでも」という感じがしますね。それから53節、  
「人の子の肉を食わず、その血を飲まずば、汝らに生命なし」(ヨハネ6・53)  
この生命は、永遠の生命と同じ質の生命です。

「我が肉を食い我が血を飲むものは永遠の生命を持つ。またそのような者を終りの日によみがえらせる」  
そういうことが書かれています。

「わたしが父によって生きるように、わたしを食べる者もわたしによって生きる」(ヨハネ6・57)

この「生きる」というのも、永遠の生命を生きるということですよ。

「先祖たちはモーセを通して与えられてパンを食べたが、また死んでしまった。でも、私というパンを食らう者は、永遠に生きるよ」

と。キリストはそう言っておられる。

このあたりで言っている「永遠の生命」というのは、肉体の生命にも及んで、死んでも死なないような、そのような書きぶりですね。もちろん我々は死ぬのだけれど、でも、

「死んでも質的には滅びない。あなたの中に、滅びない生命が宿っているのだから、肉体がどうなろうと、そのようなものは乗り越えて生命していくよ」

と。そういう霊なる生命、キリストの生命が肉体の生命を包み込んでしまうような感じで、それを突き詰めれば先ほどの、

「死ぬべき体を生かし給う」

という御言に通じる。「永遠に生きる」というのは、そのような感じですね。

そして63節には、生命の質のことが書かれています。

「活かすものは霊なり、肉は益するところなし。我が汝らに語りし言は、霊なり生命なり」(ヨハネ6・63)

それから、永遠の生命とは書いていませんけれど、8章12節のところ、

「われは世の光なり、我に従う者は暗き中を歩まず。生命の光を得べし」(ヨハネ8・12)

ここの「生命の光」というのは、永遠の生命をいただいて、その永遠の生命は光り輝いていく、そのような感じがいたします。それから、8章51節。すごいことを書いていますね。

「誠にまことに汝らに告ぐ。人もし我が言を守らば永遠に死を見ざるべし」(ヨハネ8・51)



つまり、

「私の言を本当に食らって生きるなら、あなたは永遠の生命だよ」

ということでしょう。それから10章。羊に生命を得させるといふ。その生命は永遠の生命です。

「我が羊は我が声をきき、我は彼らを知り、彼らは我に従う。我かれらに永遠の生命を与うれば、彼らは永遠に滅ぶることなく、また彼らを我が手より奪う者あらず」（ヨハネ10・27〜28）

主体はキリストです。キリストが我々に生命をくださる。永遠の生命をくださる。だから我々は滅びない。永遠に滅びない。時間的にも質的にも滅びない。

それから、11章のラザロのよみがえりのところでマリア、マルタふたりにおっしゃる言葉、

「我は復活なり、生命なり。我を信する者は死ぬとも生きん。凡そ生きて我を信する者は永遠に死なざるべし。汝、これを信するか」（ヨハネ11・25〜26）

「我は復活なり、生命なり」

とおっしゃっています。キリストのこの言葉の内実というのは、

「肉体がどうなろうと、そのようなことは関係ないよ。肉体が滅びようが、何しようが、私（キリスト）の生命は絶対に滅びない。あなた方だつて、そうだよ。肉体がどうなろうと、そのようなことで滅びるあなたではない。あなたの本来の姿は、

永遠に死なない。永遠に生き続ける生命を賜っている。生きるんだよ」といふことです。

我々は、向こうの世界に行く時は、霊体をいただきます。衣もいただきます。地上に肉体を宿している時は、宿している肉体が病んだり壊れたりします。でも、その中にもう永遠の生命は来ています。だから外なるものが破れ壊れたら、内なるものがいよいよ光り輝いて、そしてそれにふさわしい形、からだを与えられて、そして御許に、神様の住み給う天の次元へと引き寄せられていく、引き上げられていく。そのようなイメージを私は抱えています。

「だから肉体の生死なんて問題じゃないよ。永久に死なないんだ。永遠の生命なんだ。それにふさわしい姿を与えるからね」

と。ラザロをよみがえらせた時は、もとのラザロの姿にかえただけですが、でもそのこと自体も、すごいことですよ。死んで四日も経って朽ち果てようとしているものを呼び覚まして、もとの姿に復活させて再び生かしめ給う。そのラザロが本当の永遠の生命をいただくのは、十字架の御業が全うされた後ですけれどね。

それからあと、14章あたりからは、ずっと永遠の生命のことが出てきますから、ここから先は省略することにします。そして、あの大祭司の祈りのところで、

「永遠の生命は唯一の真の神にいます汝と、なんじの遣わし給いしイエス・キリストとを知るにあり」（ヨハネ17・3）



そして、20章のしめくくりのところ、

「ずっといままでイエスのことを書き連ねてきたのは、汝らをして、イエスが神の子キリストたることを信ぜしめ、信じて御名によって生命を得しめんが為なり」（ヨハネ20・31）

この生命は、永遠の生命ですね。

だから、ヨハネ伝を読んで永遠の生命をしつかり受けとらなければ、ヨハネ伝を読んだことになりませんよ。

「永遠の生命をあなた方に与えるためにイエスは来られたのだ。あなた方がそのことを信じられるように、イエスの御業と聖言を、こうやって書き連ねてきたんだよ」と。ヨハネ伝はそう言っているような感じがします。

#### 4、ガラテヤ書のなかの「永遠の生命」

そこで、皆さんに質問があるのですが、ガラテヤ書のなかに「永遠の生命」という言葉を一個所だけ見つけたんです。どこだと思えますか。

いやあ、僕も、びつくりしたと言うか、  
「あつ、こんなところに出ていたのだなあ」

と思つて、とても嬉しかった。だから今日は、それがいちばん言いたいことです。今日の私の本意はガラテヤ書なんです。

ガラテヤ書に永遠の生命がズバリ出てきている。6章8節です。ここ一個所ですね。今日日申し上げたいのは、ここなんです。

「人の播く所はその刈る所とならん。己が肉のために播く者は肉によりて滅亡を刈り取り、御霊のために播くものは御霊によりて永遠の生命を刈り取らん。我ら、善をなすに倦まざれ、もしたゆまずば、時いたりて刈り取るべし」（ガラテヤ6・7-9）

みんな、自分が播いた種を刈り取っている。自業自得という言葉がありますが、あれなんですよ。もちろんそうでない場合もいろいろありますよ、降りかかった災難とかね。でも、人生をずっと見たとき、人が味わう多くのことは、自分で播いた種を刈り取っているということが多い。だから、

「人生まじめにやりなさい。ふしだらなことをやっていて良い結果だけ貰おうというのとは厚かましい」  
ということですよ。

永遠の生命というものは、ふしだらとか何とか関係がない。次元が違いすぎるんです。永遠の生命をいただくというのは別格で、これはもう恵みそのものです。でも、それ以外の、この世の大体のこと、健康問題、社会、経済、生活などいづれにおいても、自分が播いた



種を刈り取っているということが多いのではないでしょうか。企業だってそうですし、長い目で見れば国家だってそうだと思いますよ。神をないがしろにするような、傍若無人に振る舞っている国家は、どこかでその実を刈り取るのではないのでしょうか。神様は侮（あなご）れべき方ではない（ガラテヤ6・7）。私は、そう思うんです。

ピリピ書の3章18節は前回の聖言集にも収録してありますけれど、ここでは先ほどの、「肉に播（ま）く者は肉から滅びを刈り取る」と同じことを言っている。

「そは、我しぼしぼ汝らに告げ、いままた涙を流して告ぐる如く、キリストの十字架に敵して歩む者おおければなり。彼らの終りは滅亡（ほろび）なり。おのが腹を神となし、己が恥を光榮となし、ただ地のことのみを念（おも）う」（ピリピ3・18～19）

多くの人の生き方は、この世のことだけです。家族のことにしても何にしても大事ですけど、この地上のことだけなんです。地上でうまくおさまっていけば、それでその人生はめでたしめでたし、いい人生だったということになる。それで満足している人がすごく多い。でもそれは、永遠の生命ではない。そう思われませんか。

ですから、先日のような講演会に来てくださる方は、奇特な方ですよ。やはり、地上のそういうものだけでは満足できないというか、何かむなし、何か本当じゃない、何かそういう欠乏を感じている方が、あの講演会に来てくださるのだと思います。地上のことで満ち足りている人、それ以上のことを求めない人は、来ませんね。

新共同訳では、次のようなことです。18節から読みます。

「今また、涙ながらに言いますが、キリストの十字架に敵対して歩んでいる者が多いのです。彼らの行き着くところは滅びです。彼らは腹を神とし、恥（はず）

べきものを誇りとし、この世のことしか考えていません」（ピリピ3・18～19）

「腹を神とし」というのは、自分自身を神とするという意味でしょうかね。文語訳では、

「地のことのみを思う」

新共同訳では、

「この世のことしか考えていません」

とありますが、実際、我々の周り（まわ）りでは、そのような人がほとんどなんです。

我々は、希少価値というか、絶滅危惧種（きぐんしゆ）というか、この世の人から見たら、

「日曜毎にどこに行っているのだろう。何をしているのだろう。このような桜が美

しい季節なのに日曜日に花見にも行かず、どこに行っているんだろうか？」

と、そういうふうに見えるでしょうね。この世のことしか思わなければ、健康で、災難がなくて、そこそこに地位やポストもあつて、財産があつて、最後は孫たちに囲まれて慕われて、そして静かに息を引き取る。天上とは関わりがない。それがこの世的な生き方でしょう。そして



「幸せな人生でした」  
 と言つて終る。

### 5、キリスト者の使命：「永遠の生命」を分かち与え次代に伝える

しかし、私は、それではとても満足できない。皆さんもそうだからこそ、キリストを求めて、キリストの生命を求めて、燃やし続けられて、そして、生命を分かち与えようという思いを持って集会に集つていらつしやると思つてます。

普通のひと、つまり、この世の中のことだけで生きている人間が子孫を残すというのは、この世の生命を伝えていくということです。それは、人から人でないと伝わりません。もちろん試験管ベビーとか、いろいろな人工生殖技術が発達していますけれど、正常な方法は、人から人と同じ生命をちゃんと伝えて行くというのが、人間の在り方です。動物もそうです。子孫を残すために動物たちも大変な努力をします。でもそれは、同じ生命を伝えていくだけなのです。それ以上のものは伝わらない。

それに対してキリストが我々にくださったのは、それを越えた、天上の、天に生きる生命。

### 「死んでも死なない」

というか、体が滅びようと、体が滅びた後に光輝いて天に昇つて行くような、そういう生命をキリストはくださった。それが先ほどのピリピ書では、

「されど我らの国籍は天にあり」(ピリピ3:20)

「我らの卑しき状の体を化えて、己が栄光の姿に象らせ給わん」(ピリピ3:21)

という。キリストのあの栄光のお姿と同じ姿に、我々は化されている。これが、永遠の生命をいただいている者の終局的な希望だと思えます。私は、それをリアリティとしていただいている。リアリティとして日々生きています。そういう生き方を、皆さんもしていただきたい。それはクリスチャンの義務だと思えます。つまり、この世の人たちの知らないものを示していく。

この来会者カードを見ましたら、

「先生こそ、光り輝く高霊者(光輝高霊者)」

と書いてありました。だから、我々は、他の人たちと地上における生き方の外側は同じかもしれない。いや、もつと惨めかもしれない。あくせく働かされて、人の重荷まで背負い込んで、いまにも息絶え絶えのような感じに見える。

「死にかかっているようで、このように生きており」(コリント後6:9)

とパウロも言っていますね。我々も、そういう生き方をしている。

でも、我々は、目には見えないけれど、中にはキリストの永遠の生命をいただいています。だから、その生命を伝えていく。この世の生命は、皆さん、伝えていかれます。でも、我々の使命は、この世の生命の中にいただいているもうひとつの別種の生命すなわち天の生命



を、次々に、次の世代に伝えて行くことです。その役目は、天国人としての役目です。

「我々の国籍は天にあり」(ピリピ3・20)

と。だから、我々は二重国籍です。一方では地上市民ということで役目を果たし地上での生命を伝えて行きます。けれども、それと同時に、もうひとつ別の生命をいただいている。その生命はキリストがくださった生命。キリストが、この死すべき体の中に宿ってください。

「それを伝えろ」

と言ってくれました。死すべき体が土に還かえったときに、燦然さんぜんと光り輝いて、翼をいただいて天に昇って行く、そういう生命をいただいている。その生命を伝える役目です。

「生命から生命へ」

なんです。天上の生命をいただいている我々は、その天上の生命を伝えていくという役目があります。だから、あのような講演会をやったり、いろんなことをやっているのは、そのためです。自分のことだけでいいのなら、そのようなことをする必要はない。でも、我々は使命をいただいている。

「生命を伝えろ。伝えるのは、おまえたちだよ」

と。神様が直接誰かに働いて、全然、神様を知らないこの世の人にどーんと神様が働いて、雷がおちるように、

「永遠の生命を生きるんだよ」

なんて言われても、どうしようもない。神様は人を通して働いておられるように思っています。「クリスチャンなら、永遠の生命をいただいた者として、おまえが永遠の生命を分かち与えなさい」

と。神様はそういうふう到我々をお使いになる。直接に人に働かれるのではなく、まあ、預言者に対しては、特別なことです。ですから直接に働きかけられました。でも、多くの場合は、生命を伝えるには、生命をいただいている者が生命を分け与える。この世の生命も、天上の生命も。そして増殖していく。

だから、サタンは必死ですよ。潰つぶしにかかろうとしていろいろ働く。だからこそ、

「悪あしき者より守ってください」

という祈りが必要なんです。サタンはこの世の人たちに対しては何も働く必要がない。サタンが狙ねらっているのは、永遠の生命を持っている人です。その生命を潰つぶしにかかろうとする。ちょうど、癌との戦いのようなものかもしれない。癌をやっつける生命の力と、癌が持っている死をもたらす力が、互いにぶつかり合っているようなものかもしれません。そこで、さきほども言いましたように、死すべき体をも生かし給う。神の御霊が宿っているのだから、本来崩れていくべき体であっても、お医者さんは「ここまで」と言っている体であっても、それを突破して生かしめ給う。



「はい、ありがとうございます。あなたの生命はそれだけの質があります。ラザロだって、肉体の生命ではありませんけれど、呼び戻された。そういうお方の力、霊が宿っていれば、滅び行く死すべき体を生かし給う。そして働かせ給う。使命がある間は倒れない」

と。そういう非常に積極的なプッシュしてください、そういうものを私は感じるんです。だから、どうぞ皆さんも、自分の限界とか、それに縛られないでください。無理はいけませんよ。守られるんだからと言って高いところから飛び降りるとか、そのような無茶はいけません。無茶はいけませんけれど、この世の力を越える霊、力、生命、それを皆さん一人ひとりがいただいでいらつしやる。そうしたら、必然的に、

「前を向いて、後ろのものを忘れて、前に向かって全身をのぼしていく」

という（ピリピ3・13）、ああいう姿勢が出てくるんです。それを示していただきたい。

若い人は「元気で当たり前」と言われる。だから、我々、後期高齢者（光輝高霊者）こそ、本当にその姿をあらわして行けば、

「やっぱり違うな。何が彼をしてそうせしめているのだろう。何が、彼らをこのように生き活きと生かしているのだろう。希望を持って輝かせているのだろうか」

と言ってもらえる。そして、永遠の生命の質は「愛」です。我々は、単に永遠の生命をいただいているだけではなくて、その生命を生き抜く。その生き方というものが、必然的に、キリストが歩まれたような生き方になって来ざるを得ないんです。ロマ書では、

「キリストとともに栄光を受ける以上、苦難をも共にする」（ロマ8・17）

となっていて、栄光が先に出てきているのですが、私は、

「苦難も共にして、栄光も共にする」

というのが本当だと思っんです。

「御霊みずから我らの霊とともに我らが神の子たることを証す。もし子たら

ば世嗣たらん、神の嗣子にしてキリストと共に世嗣たるなり。これはキリス

トとともに栄光を受けん為に、その苦難をも共に受くるに因る」（ロマ8・16）

17

6、キリストと一緒に生きてゆく、苦難も栄光もキリストとともに

我々は、キリストの苦難をも、共に受ける。地上にある限り、我々はいろいろな苦難を担いながら、それを突破していく。パウロの生き方を見てもそうでしょう。ものすごい苦難を突破していききましたものね。そのあたりが、この世的な宗教と違うところです。この世の御利益宗教というのは、プラスばかりを約束する。

我々は、キリストと運命共同体。キリストと一緒に生きて行く。キリストが味わったことは全部味わって、それを当たり前と思っっている。いいところ取りをするなんて、そのよう



なことはいたしません。キリストとすべてを共にしていく。愛というのは、そういうものでしょ。愛する人とならばどんなことでもやりますと言うじやありませんか。

「僕と結婚してください。あなたとなら、どんなことでもやります」

という、あの言葉をいつまでもちやんと守るべきなんです。

我々はキリストと苦難をともにする。キリストが歩まれた道を歩む。

「キリストの心を心として」

とピリピ書にありました。キリスト様だけを見て行ったら、間違いありません。キリストと同じように、喜びも悲しみも苦しみも一緒に行く。キリストは、マルタとマリアの悲しみを共有なさいましたものね。涙を流しておられます。マルタとマリアの悲しみを、自分も同じように味わって、それから神様に向かって、

「あなたはどんなことでも聞いてくださいます」

と言って、御業を現されました。

だから、私たち、永遠の生命をいただいた人間は、キリストと本当に一つにされて、キリストが歩むとおりに歩んで行く。キリストがいつも私たちと一緒にあって、キリストが私たちを抱きしめ、担い、一緒に歩いてくださる。キリスト主体。自分の力に頼らない。もともと自分に愛想をつかしてキリストに救われた人間なんです。だから、

「御霊によって始まったら、今さら肉によって歩もうとするな」

ということ。律法によって歩むということは、自己を出発点とすることです。今の世の中、自己決定権ということが言われます。そして、

「すべて自分で責任を取りなさい」

と言う。我々はそれができないから、キリストのところに来たのであって、キリストに預けて行けば、この世の人以上にこの世の使命を果たすことができる。

「**霊に播く者は霊から永遠の生命を刈り取り、肉に播く者は肉から滅びを刈り取る。**御霊のために播く者は永遠の生命を刈り取る」

我々は、御霊の導きにすべてを委ねて、自分の力で計画を立てて自分でこれをするという、その「自分」というのをもう捨て去って、

「聖霊の皆さま、どうぞ、あなたが、なすべきことを教え、なすべき力を与え、そして一切を御心のままに導いて行ってください。私は自分からは何もできません。皆さま、あなたご自身も、自分からは何もできないとおっしゃいました。ましてや、我々は、自分でできるなんて思いません。全部あなたの導きに委ねますから、どうぞ、見守りと導きの中に私を運んで行ってください」

と。私の祈りは、そういう祈りです。それが、

「**御霊のために播く者は永遠の生命を刈り取る**」

という生き方だと思っています。



それで私は、昨日聖書を読んで、ガラテヤ書6章に一個所だけ「永遠の生命」という言葉が出てきて、これがすごく嬉しかった。御霊に在って、御霊のために、御霊に導かれて生きる生き方をする者は、その御霊によって永遠の生命を刈り取る。だから、この世的なものではなく、御霊に導かれて生きる。キリストが導いてくださる生き方に徹していきます。そのような思いで、今日はお話をいたしました。それがロマ書の、

「**霊に生きる者と肉に生きる者**」

「**霊の思いは生命なり、平安なり。肉の思いは死であり、滅びである**」

それとつながっているように思いました。それでは、終わることにいたします。

## 祈り

主イエス・キリストさま。今日もこのように兄弟姉妹をそれぞれの所からこの祈りの家呼び集めてくださり、ありがとうございます。一週間前の3月27日、午前の復活節集会そして午後の講演会と、あなたはフルに働いてくださり、集う者の中に永遠の生命となつて宿ってください、**生命づけてください**ましたことを感謝いたします。

主さま、人間の中から生命は出てきません。生まれながらの人間からは、生まれながらの生命しか出てまいりませんし、また、伝えることもできません。天の生命をひっさげて地に降くだつてくださったあなただからこそ、あなたがお持ちになつていた永遠の生命の質を、あなたを体受する一人ひとりに宿してください、生かしてくださいました。そのためにあなたは、十字架という、誰もできない永遠の贖罪しよくざいの御業みわざを全うしてくださいました。

主さま、永遠の生命と申ししても、この十字架の尊い犠牲、この死、これによつてはじめて、天上のものが我々の中に聖なるものとしてお宿りくださることができまますし、罪ある我らが罪なき者とされ、あなたの御意みこころの中に生きる義人とされました。御霊みたまに生きる者とされました。どうぞ主さま、このご恩寵おんちようを生涯忘れることなく、日々に出発点として、あなたの御十字架おんをいただき、そこに死生の転換を見て、

「**我生われくれば汝も生なくべし**」

とあなたがおっしゃってくださいました、本当にあなたと生きる天国人とならしめてください。そして、この地上のことしか知らない方々に、

「この天の生命があるよ。天の世界があるよ。これこそ永遠の世界だよ。滅びない輝きを持った生命の世界だよ」

ということ、どうぞ我々の日々の生活を通して、歩き方を通して、働き方を通して、実証していくことができますように。それに倣ならう方が生まれてきますように、どうぞ我らを導き、御守りください。

病んでいる方には、本当のあなたの生命の力を与えて、死から生命へと変貌せしめてください。ラザロをあなたが復活させ給うたように、あなたは、肉体に働く死の力をも粉碎



して、死すべき体も生かしてくださいとお約束くださいましたから、どうか一人ひとりが本当に前向きに、後ろのものを忘れて前に向かってひたすら体を伸ばしつつという、あなたを原動力として盛んなる生命を生き抜くことができますように、お一人おひとりを導いてくださるよう、こいねが希い奉ります。

主さま、我々は本当に少数でございませう。しかしながら、

「**小さき者よ、おそれるな、御国を賜うことは父の御意なり**」

「二、三人我が名によりて集うところに我も在るなり」

と、あなたはお約束くださいました。「永遠におまえたちと一緒に居るから」と約束してくださいました。

主さま、どうぞあなたがこの集会の中に充滿し、あなたの御体であるこの集会を、我々を大切に、そして、ここで生命がはぐまれていきますように。どうぞ、お一人おひとりを強め、お用いください。各地にあります主に在る兄弟姉妹を、また、弱っている兄弟姉妹をどうぞ今力づけてください。

主イエス・キリストの尊き御名を通して、この祈りを御前にお献げいたします。アーメン。

（小冊子『永遠の生命』を生きる）より転載

